

がんのリハビリテーションマニュアル 周術期から緩和ケアまで

辻 哲也 編

＜書評者＞ 生駒一憲（北海道大学病院教授・リハビリテーション科）

今日、がん医療に対する注目は非常に高い。これはがん医療の進歩が著しく、不治の病ではなくなりつつあることが1つの理由であろう。ところで、このがん医療の進歩を支えるのがリハビリテーションであることをご存じだろうか。リハビリテーションは、1人1人の生活がより快適で意味のあるものになるようにさまざまな手法を用いてアプローチする専門技術である。がん患者の生存率が伸び、がんと共に生きる時代では、このリハビリテーションの良し悪しが人々の生活の質に直結し、ひいては人生そのものにも影響を及ぼすことは想像に難くない。薬物、放射線、手術などの進歩を、人にとってより恩恵のあるものとするために、リハビリテーションは不可欠である。

このたび辻哲也先生が編集された『がんのリハビリテーションマニュアル——周術期から緩和ケアまで』は、がんのリハビリテーシ

ョンを行ううえで、押さえるべき基本と実際の臨床をバランスよく著したもので、今まさに待望の1冊である。

辻先生は日本のがんのリハビリテーションを先導され、今日、名実ともにこの分野でのリーダーである。2010年度診療報酬改定で設けられた「がんのリハビリテーション料」算定に必要な研修会の開催を主導され、また、現在はがんのリハビリテーションガイドラインとグランドビジョンの作成に傾注されている。この書物を編纂されるに最もふさわしい先生である。

本書の内容は以下のようなものである。第1章「総論」は辻先生の執筆により、がんのリハビリテーションの概要と重要性が簡潔に記されている。この章を読むだけでも十分価値のある書物であるが、臨床に携わる諸氏はさらにその実際を知らねばならない。第2章では、「脳腫瘍」「頭頸部がん」

「乳がん・婦人科がん」「肺がん・消化器系がん」「骨・軟部腫瘍、骨転移、脊髄腫瘍」「造血器腫瘍」「小児がん」についての実践的な記述が続く。図表や写真を多用し、臨床ですぐに役立つように工夫されている。第3章は緩和ケアのリハビリテーションについて述べられており、その中の見出しには「進行がん・末期がん」「がん性疼痛」「廃用症候群・体力消耗状態・がん悪液質症候群」「進行がん患者の基本動作、歩行・移動障害」「進行がん患者の呼吸困難」「日常生活動作」「緩和ケアチーム」「こころのケア」などの言葉が登場する。この分野のリハビリテーションアプローチも欠かすことはできない。

がん医療は上述のようにリハビリテーションなくしては成り立たない。この1冊ががん医療に携わる多くの人々に読まれ、がんのリハビリテーションが医療現場に浸透し、がん患者に恩恵がもたらされることを切に望む。

●B5 頁 368 2011 年
定価 4,830 円
(本体 4,600 円＋税 5%)
[ISBN978-4-260-01129-7]
医学書院 刊